

# しあわせ

2 月 号



なごりをしくおもへども、  
娑婆の縁  
尽きて、  
ちからなくしてをはるとき  
に、  
かの土へはまゐるべきなり。

〔『歎異抄』 第九条〕

## 「手を合わす母」

神戸から2年前に迎えてお世話していた前坊の母が一月八日午前二時四十分息を引きとり、往生の素懷を遂げた。

年末から流動食も取れなくなり、やがて茶さじ一杯の水も受けなくなつて体内から排泄物も出つくし、ふくよかだった顔も別人のように細くなつて眠るがごとくという表現の通り、龍仙寺寺族が見守る中、百年の人生を終えた。

龍仙寺では、年末から年始にかけて親族が神戸をはじめ京都や山陰から立ち替わりやつてきて満百歳の誕生日をお祝いし、通常とは違った年末年始となつた。

二年前、広島に来た時はまだふくよかさが残つていた母の体内から栄養分も水分も抜け切つた遺体の火葬後はわずかな遺骨が残るだけだった。

取骨に立ち会つた曾孫になる年少のひとちゃんも夜、布団の中で泣いていたとのこと。人生で初めて人の死、という現実・別れの厳しさを突きつけられたショックはあまりに大きかつたようである。

## 法座案内

△法味の会▽

二月十七日 午前十時

お話し 住職 武田一真

△春季彼岸会法要▽

三月 十七日(金) 昼席・夜席

十八日(土) 昼席

講師 米田順昭 師

(廿日市市 最禪寺住職)

※本堂内は常時換気しておりますが、参拝の際は、検温・マスク着用をお願い致します。

府中町山田二丁目一五十三  
栢原山 龍仙寺

電話(〇八二二八)一四八二



大正十二年、親鸞聖人御誕生七五〇年の年に生れた祖母は、令和五年一月八日、聖人御誕生八五〇年の年にお浄土に参らせていただきました。昨年末からほぼ何も食べられなくなり、年を越えることは難しい状態でしたが、よくがんばってくれて、正月二日には満百歳の誕生日を迎えることができました。

母の里である神戸で生れた私に、幼いころから、祖母は何度も語ってくれました。

「あなたはここ（神戸）で生まれたのよ。あなたは赤ちゃんのとき血便をくだしてねえ。お婆ちゃん、本当に慌てたのよ。大切な跡とりを預かっているのに、どうしましようって。でもね、お医者さんに診てもらったら、『ミルクの飲みすぎです』って言われてねえ……」子供のころから「神戸のお婆ちゃん」と呼んでいましたが、事情あって龍仙寺にやってきたのは二年前。コロナ禍において寝たきりの祖母を広島に迎えることは容易ではありません

んでしたが、「うちで見たらええ！」という前任職のツルの一声で、神戸のお婆ちゃんは、神戸のお婆ちゃんではなくなりました。

お正月には、遠方から来てくれた従弟たちの声にうれしそうに伝えてくれましたが、が、いよいよお水も飲めなくなり、母はスポンジにお水を含ませて祖母の口を潤しつつけました。亡くなる二日前には昏睡状態が長くなり、ほぼ反応ができなくなっていました。子供たちがいつものように、お風呂上がりには祖母のもとへ行き、ご近所まで聞こえそうな大きな声で「おばあちゃん、おやすみなさい！ またあしたねー」とご挨拶をすると、おばあちゃんが「：はい」と応えてくれたことを、長女はうれしそうに日記に記しました。

ありがたうは尽くせませんが、その言葉を伝えられることが、ありがたいことでした。「ありがたうね、お婆ちゃん。ありがたう。お浄土に、生まれていくんじゃね。お爺ちゃ

んも、紹ちゃんも、待ってくれとるけえね。みんな精一杯がんばって、参らせてもらうけえ、待っててね。お婆ちゃん。ありがたう……」生まれてきた自分を抱いてくれた祖母の、命の終わりを看取らせていただいている、そう思うと、かける声が想いでふるえました。

一月七日の夜から、祖母は下顎をつきだすようにして呼吸するようになりました。「スーハー」「スーハー」ひと呼吸、ひと呼吸、精一杯いのちを尽くすように。その呼吸が少しずつ遅く、浅くなり、吐いた息がとぎれるようになりましたが、母が「お婆ちゃん、吸わんと！」と声をかけると、また「：スー」と吸ってくれました。やがてその声にも反応できなくなりましたが、母が「お母ちゃん、吸って」と呼び方を変えると、またひと息、ひと息、吸ってくれました。ひと息でも永くこの世と一緒にいてほしい、その母の思いに応えるように、祖母は最後まで、精一杯、呼吸を

つづけました。そして最後のひと息がとまったとき、母のかける声が変わりました。「また会おうね」

祖母はひと粒、涙をこぼしました。その涙を、坊守がやさしくぬぐってくれました。

なごりをしくおもへども、娑婆の縁尽きて、ちからなくしてをはるときに、かの土へまゐるべきなり。 (『歎異抄』第九条)

私たちはいつか必ず、愛するものを残して、この世を去っていくかねばなりません。名残おしく思えども、娑婆の縁つきで、力なく終わってゆかねばなりません。しかし、まさしくそのとき、参らせていただけの世界がある。そして、「また会おうね」と、言い切らせてくださるはたらきに、今ここで包まれている。このことを、親鸞聖人はお伝えてくださったのです。お聞かせいただいているおみりの温かさを、深くかみしめるばかりでした。